

2. 新町における世帯の移動(新町)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4829

2. 新町における世帯の移動

西川 麦子

はじめに

- I 新町の世帯の転出入
- II 戦前の世帯移動：街道沿いの町家
- III 戦後の世帯の転入：新たな宅地の形成
- IV 1970年代以降の世帯の転出：古い町家が抱える問題
- V 新町出身者の結婚後の居住地
- VI まとめ

はじめに

新町は金沢のベッドタウン化がすすむ今日の鶴来町の一區画にあり、かつては山村と農村とを結ぶ市場の要として地域の商工業の中心地であった。本稿では、新町の世帯数の動態、転出入の特徴をおうことよって「在郷町」、「金沢のベッドタウン」という新町の二面性を明らかにしてゆきたい。

本文のIでは、新町の世帯数の動態、転出入の大きな流れを概観する。IIでは、街道沿い（国道157号線）に密集する町家の、戦前の世帯移動についてとりあげる。IIIでは、戦後の新町への世帯の流入、とくに山間部の集落からの転入について述べる。IVでは、1970年代以降の世帯の流出の要因として、とくに新町の町家の古い家並みが抱える問題について扱う。そしてVでは、新町出身者の結婚後の居住地について述べてゆく。

I 新町の世帯の転出入

この節では、新町の世帯数の動態、住宅の分布、町会の班の構成についての資料をもとに、新町の世帯の転出入の大きな流れを概観する。

新町の世帯数、人口の動態は、表-1から明らかなように、戦後大きく変動している。新町の世帯数は、1883（明治16）年に93であった。戦後1955（昭和30）年には109あったが、その後15年間に世帯数は急増し、1970年代前半にはピークに達し150を越えている。1970年代後半からは世帯数は逆に急減し、1980年代前半には100前後となる。その後はゆるやかな減少傾向を示し、1993（平成5）年現在には89世帯となっている。

新町の世帯数が急増あるいは急減した時期に、転出入のどちらかがゼロであった年は少なく、1年ごとの世帯数の変化から読み取れる以上に、新町を構成する世帯・住民は毎年激しく入れ替




表-1 新町の世帯数・人口

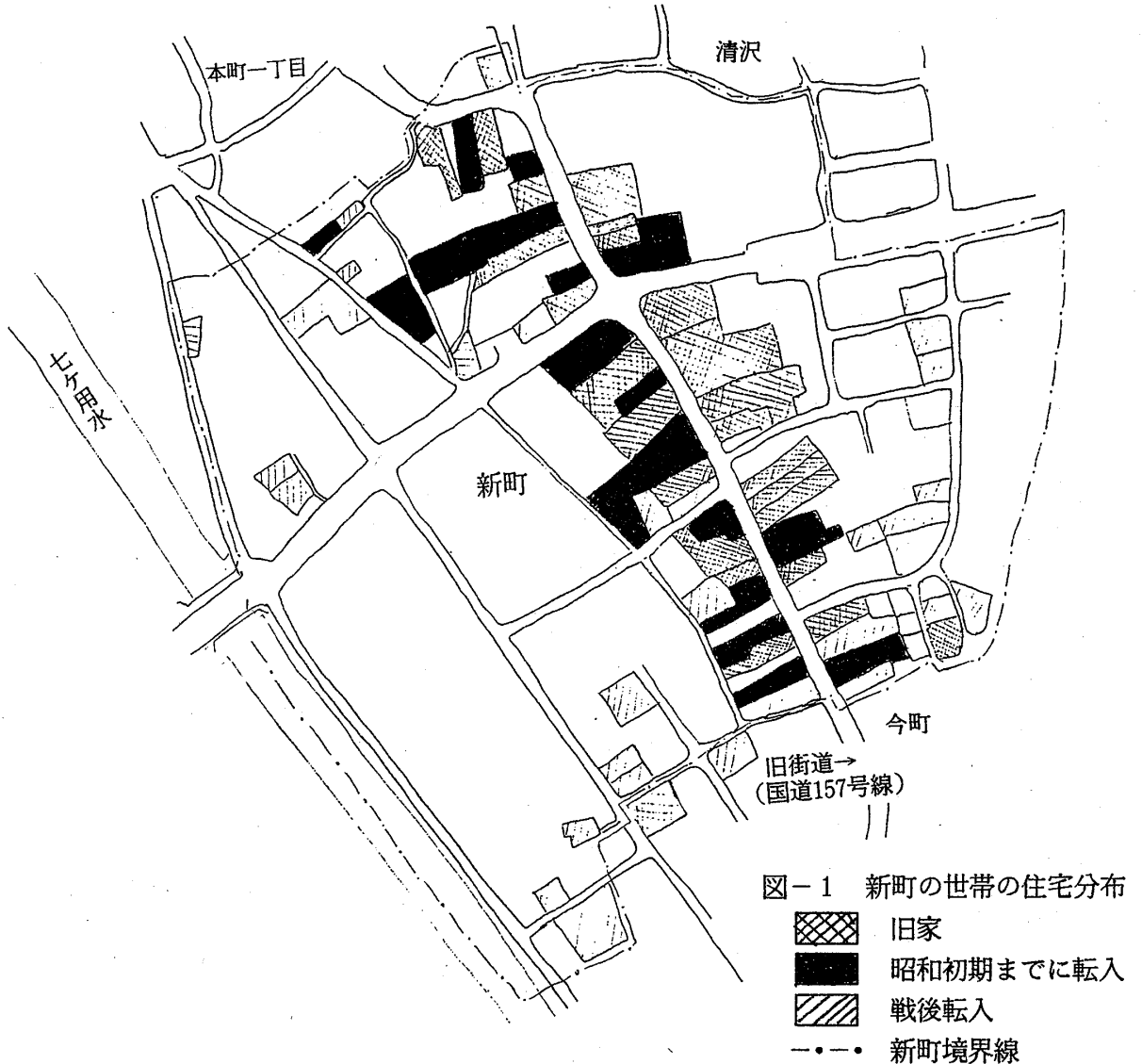
西暦	世帯数	転入世帯数	転出世帯数	世帯数増減	人口	人口増減	平均世帯員数	
1883	93							*1
1933	86				463		5.38	*2
1955	109				501		4.60	*3
1965	126				551		4.37	*4
1970	150				611		4.07	*5
1971	148	8	10	- 2	602	- 9	4.07	
1972	153	9	4	+ 5	613	+11	4.01	
1973	152	5	6	- 1	616	+ 3	4.05	
1974	143			- 9	583	-33	4.07	*6
1975	141	6	8	- 2	565	-18	4.01	
1976	139	5	7	- 2	549	-16	3.95	
1977	137	5	7	- 2	540	- 9	3.94	
1978	109			-28	450	-10	4.13	*7
1979	104	0	5	- 5	443	- 7	4.26	
1980	101	2	5	- 3	436	- 7	4.32	
1981	101	3	3	0	416	-20	4.12	
1982	98	2	5	- 3	415	- 1	4.23	
1983	100	4	2	+ 2	428	+13	4.28	
1984	101	2	1	+ 1	425	- 3	4.21	
1985	95	0	6	- 6	413	-12	4.35	
1986	91	0	4	- 4	397	-16	4.36	
1987	92	2	1	+ 1	394	+ 3	4.28	
1988	91	3	4	+ 1	380	-14	4.18	
1989	93	3	1	- 2	385	+ 5	4.14	
1990	92	1	2	- 1	378	- 7	4.11	
1991	92	2	2	0	379	+ 1	4.12	
1992	89	0	3	- 3	358	-20	4.02	
1933	89	1	1	0	347	-11	3.90	

- * 1 『商工会70年史』180
- * 2 『郷土誌』22
- * 3 『鶴来町史』627
- * 4 『市町村地区別人口及び世帯概要』1965年
- * 5 以下鶴来町役場調べ 各年12月末日現在集計
- * 6 8ヶ月分資料なし
- * 7 11月資料なし

わっている。

新地町の世帯数が激しい変動を示しているのは、新町に持ち家をもつ世帯の転出、あるいは新町に住宅を購入して転入してくる世帯のほかに、新町にある借家や社宅に一時的に居住する人々の転出入の数が含まれてることも一因している。たとえば第2次世界大戦中に作られた疎開者のための住宅や、戦後の手取川上流域の土木工事関係者の社宅などへの入居者、あるいは新町の商工業者のもとで働く人々の移動である。本稿では、新町に持家をもつ世帯の転出入に問題をしぼり、こうした一時的居住者については考察から省いている。

現在の新町の住宅の分布と町会を構成する班の世帯数からも、新町の住民の複雑な構成とこれまでの転出入の流れをみる事ができる。図-1に、新町の住宅を次の3つに区分して記入した
 は、新町の古くからの「旧家」(後述)、
 は、昭和初期までに新町に転入してきた世帯、
 は、戦後新町に転入してきた世帯である。



新町は鶴来街道沿いに町家が密集する市街地を形成してきた。今日でも街道沿いには、古い町家の家並が残っている。しかし、現在の街道沿いに居住する世帯のすべてが、古くから新町に住む旧家ではない。街道沿いの町並みを構成する世帯の半数は、明治後半から昭和初期までに新町に転入した。一方、戦後新町に転入してきた世帯の大半は、街道沿いではなく、それ以外の区画に居住している。

現在の新町の町会は、83世帯10班からなる。もともとは街道沿いの南から北へ1班から7班、街道から少し奥に入ったところに8班と、8つの班に区切られていた。戦後は田畑や櫛林であった土地が宅地として利用されるようになり、新町の街道沿い以外の区画に多くの世帯が流入して

きた。このため1965年ころに9班が、1975年ころに10班が加えられた。

1993年現在の各班を構成する世帯数は、1班7、2班8、3班20、4班6、5班6、6班7、7班4、8班3、9班15、10班7と、班ごとに大きな差がみられる。各班は、もともとは10世帯前後で構成されていたが、班によって世帯の転出入の状況が異なり、現在のような世帯数の差が生じた。3班は、街道沿いの世帯の他に、新町の南端の宅地に転入してきた世帯を同班に加えたので世帯数が最も多くなっている。8班は、街道から少し入ったところに住宅があったが、道が狭く車の出入りが不便であるため多くの世帯が転出していった。街道沿いでは戦後転入した世帯は非常に少なく、世帯数は減少傾向にある。

新町の世帯数の動態、住宅の分布、班構成から、新町の世帯の転出入には、大きく3つの流れがあったと考えられる。第1は、街道沿いの町家の戦前の世帯の移動、第2は、第2次世界大戦後に宅地化された区画への世帯の流入、第3は、1970年代以降の街道沿いの住宅からの世帯の流出である。次節からこの3つの流れについて順次述べてゆく。

II 戦前の世帯移動：街道沿いの町家

鶴来の郷土誌家武田閑雲は、天保6（1835）年の冥加銀書上帳、元治元（1864）年の御借上銀書上帳、明治5（1872）年ならびに昭和25（1950）年の戸籍簿をもとに、旧鶴来町の旧家名簿を作成している（『鶴来町旧家名簿』）。この旧家名簿には、先代屋号、通称、別（商）号、当主氏名、現住所が記録され、新町については、旧家として35の家が挙げられている。明治初期には新町に在住していたと思われるこの35の旧家のうち、現在も新町にあるのは3分の2の22世帯である。残り13世帯は、他地域へ転出ないし絶家している。

現在の新町には、街道沿いに44の世帯が居住しているが、このうち上記の旧家が21世帯、戦後転入してきた世帯が3、残りの20世帯は、明治中期以降大正、昭和初期にかけて新町に転入してきたと思われる。街道沿いの町家では、世帯の転出入が頻繁に生じていたようだ。戦後街道沿い転入した3世帯を除く41世帯は、かつてなんらかの商工業を営んでいた。現在でもこの41世帯のうち23世帯が、商工業を営んでいる。

新町の街道沿いに住むAさん（60歳代男性）の家も、1905年に旧鶴来町内の上東町から新町へ転入した。新町の酒屋の家を購入した。上東町では刻み煙草を製造していたが、新町へ転入したのを機会に醤油屋を始めた。街道沿いの町家の出入りについて、Aさんの話をまとめると次のようになる。

「明治時代の新町の世帯数は90と聞いている。商売は「3世代続いたらたいしたもの」と言われるくらい栄枯盛衰があり、だめになった家は他所へ移ってゆき、新しい世帯が入ってきた。旧家といっても明治以降新町に移ってきた家が多い。」「農村では、土地分割を避けるため分家を許さなかったところもあるが、新町は商売どこなので、分家に関する規制はなかった。分家して

他町内から新町に入ってきた家はあるが、新町内での分家は少ない。新町では本分家関係はとくに重んじられず、それよりも商売の実力が重視された。」

旧鶴来町の市街地は、町内の境界を越えて世帯の移動が頻繁に行われてきた。他町内の商家からの分家、街道沿いの区画に居住し新たに商売を始めたいと希望する世帯、商売上よりよい立地条件の区画へ移ろうとする商家などが、経営困難となった街道沿いの町家を買って取り替えてきた。市街地の中心地であった新町へ転入を希望する商家は、とくに多かったのではないかと思われる。

Ⅲ 戦後の世帯の流入：新たな宅地の形成

現在の新町町会83世帯のうち、4割を占める33世帯が戦後新町に転入してきた。戦後の新町への世帯の流入は、それまでの街道沿いの商家の世帯移動とは次の2つの点から性格が異なる。第1は、戦後転入した世帯のほとんどが、商工業の経営者ではなく宅地を求めて新町に移ってきたこと、第2は、旧鶴来町をこえたより広い地域から転入していることである。また、現在の鶴来町の農村地区でみられるような「団地」への世帯の流入ではなく、それぞれの世帯が個別に宅地と家を購入している。

戦後新町に転入してきた33世帯のうち、今回の調査で出身地を知ることができたのは28世帯である。この半数以上を占める15世帯が山間部（白峰村、鳥越村、尾口村、河内村、吉野谷村）から転入してきた。鶴来町内からは9世帯、その他の地域からが4世帯である。

山間部から転入してきた15世帯のうち、白峰村の出身が最も多く6世帯である。白峰村からは新町に限らず鶴来町内の各地に転入している。鶴来町へ転入した白峰村出身者は「白鶴会」を作り、毎年新年会、報恩講、団体旅行などを行っている。

白峰村三ツ谷集落から新町に移ってきたBさん（70歳代女性）の話によると、白峰村から世帯が流出し始めたのは1955年ころからで、主な転出先は、鶴来町、金沢市、勝山市である。子供の通学の不便さ、十分な医療サービスを受けることができないことが転出の大きな理由であるという。

1961年8月の地震、同9月の風水害という2つの自然災害の後、Bさんの世帯を含む三ツ谷集落の8世帯がすべて集落から転出した。鶴来町へ3世帯、金沢へ3世帯、福井の勝山市へ1世帯、大阪へ1世帯と移っていった。Bさんの世帯が新町に転入したのは、当時すでにBさんの実家が新町へ、妹の世帯が今町へ移り住んでいたことが大きな理由である。またBさんの世帯は、山の手入れをするため白峰村へ通うことができる圏内へ居住することを希望していた。新町では、旧鶴来小学校の校舎の一部を購入し、住宅として改築した。新町に転入してからもBさんの夫は植林のため白峰に通っている。

新町を含む鶴来地区は、山間部の人々にとって次のような理由から転入しやすい地域であると

考えられる。第1に、鶴来地区は、市場として古くから山間部と密接なつながりがあった。第2に、もともと世帯の出入りがあり、新しい世帯の転入が受け入れられやすい。第3に農村部より就職口が多く、さらに金沢への通勤も可能であり、第4に山間部へ通うことのできる位置にあることである。

IV 1970年代以降の世帯の転出：古い町家が抱える問題

1970年代後半以降、新町の世帯数は減少傾向をたどる。新町では過去20年間のあいだに街道沿いから多くの世帯が流出した。転出の主な要因として次の3点があげられる。第1は、鶴来町のなかでの商工業の中心が、新町、今町から鶴来地区北部へと移動していったこと、第2に、古い商家の家並が現在の住宅としていくつかの欠点を抱えていること、第3は、道路整備にともない移転を求められた世帯が、それを機会に新町内ではなく他地域へ転出したことである。

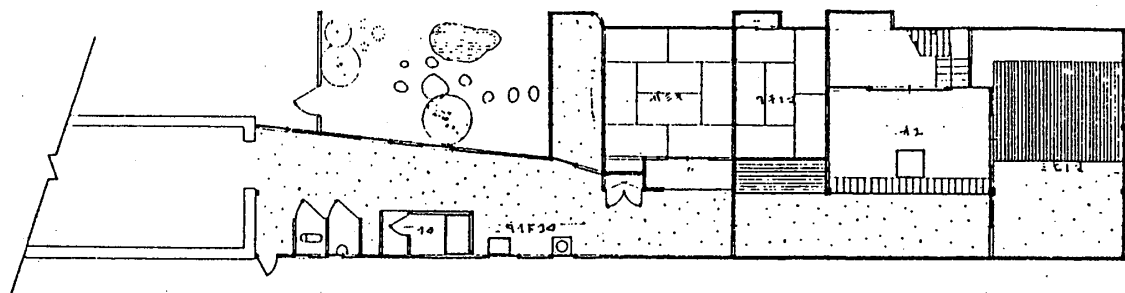
第1点については、4章、5章で詳しく論じている。第3点の道路整備は転出の直接のきっかけであるが、第1、第2点が転出を促す要因の背景となっていると考えられる。この節では、世帯の流出のひとつの要因となっている町家の古い家並について述べてゆく。

金沢工業大学建築学科は、1978年に金剣宮の門前町通り、鶴来街道を中心に、鶴来町に残る古い家並について調査し、『鶴来の民家』をまとめている。

新町の町家の保存状態については、「保存状態のすぐれている部分は、主要道である国道沿い（鶴来街道）に多い。特に本町1丁目、新町あたりにその傾向が強い」（26～27）と述べられている。同報告書の町並み保存度図をみると、新町の街道沿いの大半の家が、保存度1〔ほとんど昔のままで保存されている〕か保存度2〔一部分だけが少し変化している〕である。

また、鶴来町の町家の伝統的家屋の平面プランの特徴が次のように説明されている。「平面プランを分類してみると、各々みせの間・居住部分・通り庭に3別される。また、どの家にも中庭（あるいは裏庭）と土蔵がつくられている。なかでも通り庭は、町家において非常に重要な空間になっており、店先・住居・裏をつなぐもので、その天井には明かり取りの窓がもうけられていることが多い。また通り庭が台所のスペースを兼ねている例もよく見受けられる。」(47)(図-2)

図-2 鶴来の伝統的町家の平面プラン



『鶴来の民家』70より

このような特徴をもつ新町の家屋について、新町の住民からは次のような話が聞かれる。「大通り（街道）沿いは、間口が狭く奥行きがある家々が隙間なく立並んでいる。流しやお風呂は奥の方にあるため水道工事には時間もお金もかかる。また道路拡張、整備のために古い家や土地を手放し、それを新しい家を買う資金にする人も多く、大通り沿いの家は空洞化が目立つが、空き家になった隣の敷地を買い取って広い土地を持っている人も多い。」

「鶴来町の水洗率は平成4年度末まで約60%である。このため平成5年度末までに100%を目指して水道工事がすすめられている。しかし、この下水道工事のために古い家を建て直すことを嫌がる人々がでてきた。家を修築するより新しい家を建て直した方がいいという人が新町を離れることが多かった。」

「車の時代となって、地面の大きな家は新町に残るが、車庫のスペースのない家は、家を改築するかわりに、他所へ移っていった。とくに8班は、道が狭く車が入れない。新しい道路建設の目途がたらず、15軒あった世帯のほとんどが転出し、現在は3軒だけが残っている。」

図-1の住宅地図をみてもわかるように、街道沿いには、間口はさして広くないが奥ゆきが深い縦長の家が隙間なく並んでいる。伝統的家屋が現代の住宅として不便である点はいくつもあるだろうが、とくに車庫をつくるスペースがとりにくく、また水洗化のための上下水道工事に多額の費用を要するという点が問題となっている。水洗化について、新町の役場から配布された5枚綴りの資料では、次のように住民に水洗化をよびかけている。

「水洗化に理解をいただくため個別訪問を実施します。鶴来町公共下水道事業は、昭和63年3月31日に供用を開始して以来、平成4年度末までに156ha、5,946人が生活する区域の整備を終えました。・・・、期限経過のお知らせや加入の遅れている家屋への催告通知などを行ってきましたが、平成4年度末の水洗化率が約60%と未だ充分とは言えず、せっかくの下水道施設が100%活用されていない現状です。」「下水道への接続は法律で義務づけられています。・・・下水道法第11条の3の第1項の主旨は、処理区域内における汲み取り便所が設けられている建築物を所有する者に対し、処理開始の日から3年以内に汲み取り便所を水洗便所にしなければならない義務を定めたものである。・・・。」

同資料の「単独公共下水道鶴来处理区内供用開始年度別接続状況一覧表（平成5年3月31日現在）」によると、新町では1988年度から供用が開始され、1993年現在では下水道接続率は54%である。水洗化の下水道工事が可能になってから5年の年月がたっているが、新町では半数近い世帯では水洗化が実施されていない。

商工業中心地の移動、道路整備に伴う移転、町家の古い家並、が要因となって新町の街道沿いから世帯が流出しているが、転出したあとには、かつてのように他所から別の世帯が転入しているのではなく、隣接する世帯がこれを買取り地所を拡げている。

V 新町出身者の結婚後の居住地

II、III、IV節では、明治から今日にいたるまでの世帯移動の3つの流れをたどってきた。この節では、新町出身者の結婚後の住所についての資料から、新町と周辺地域との関係を見てゆく。

鶴来町では、1962年4月から毎月1回「広報つるぎ」を発行している。その最終ページには、鶴来町に本籍ないし住民票がある者の婚姻について、夫婦の氏名、本籍、結婚後の住所を記載している。1962年4月から1993年7月までの「広報」から、新町に本籍をもつ男性154名、女性110名の婚姻についての情報が得られた。

これらの男女の結婚後の住所を、A1〔新町〕、A2〔新町を除く鶴来町〕、A3〔野々市町、辰口町、寺井町、川北村、美川町、根上町、松任市、小松市〕、A4〔河内村、吉野谷村、尾口村、白峰村、鳥越村〕、A5〔金沢市〕、A6〔その他の石川県内〕、B1〔富山県、福井県、新潟県〕、B2〔東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県、茨城県、栃木県〕、B3〔大阪府、京都府、兵庫県〕、B4〔日本国内その他〕、C〔海外〕に分類し、その結果を表-2にまとめた。

表-2 新町に本籍をもつ男・女結婚後の住所

	男 154人		女 110人	
	人	%	人	%
A1	54	35.1	6	5.5
A2	33	21.4	13	11.8
A3	9	5.8	13	11.8
A4	0	0	5	4.5
A5	20	13.0	33	30.0
A6	2	1.3	8	7.2
B1	3	1.9	3	2.7
B2	20	13.0	19	17.3
B3	5	3.2	6	5.5
B4	8	5.2	3	2.7
C	0	0	1	0.9

『広報つるぎ』1962年4月～1993年7月より作成

A1〔新町〕、A2〔新町を除く鶴来町〕、A3〔野々市町、辰口町、寺井町、川北村、美川町、根上町、松任市、小松市〕、A4〔河内村、吉野谷村、尾口村、白峰村、鳥越村〕、A5〔金沢市〕、A6〔その他の石川県内〕、B1〔富山県、福井県、新潟県〕、B2〔東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県、茨城県、栃木県〕、B3〔大阪府、京都府、兵庫県〕、B4〔日本国内その他〕、C〔海外〕

新町に本籍をもつ男性154名の結婚後の住所は、新町（A1）が最も多く54、続いて新町を除く鶴来町内（A2）が33、金沢市20（A5）、関東方面が20（B2）である。男性の場合、1962年以降の婚姻のうちの56.5%までが鶴来町内に居住し、金沢在住者をあわせると69.5%となる。結婚後山間部に居住する者はゼロである。

新町以外の鶴来町（A2）に居住する33件について、その居住区域をさらに詳しくみてゆくと、1962年から1974年までの14の婚姻については11件までが鶴来地区内に在住している。1975年から1993年までの19の婚姻では、鶴来地区内は半数の10件であるがこのうち3件は朝日町の「団地」に居住している。残り9件の居住区域は、蔵山、林、館畑地区である。若い世代の夫婦が、旧鶴来地区の市街地よりも、農村部に新たに作られた「団地」に居住する傾向にあると考えられる。

新町に本籍をもつ女性の場合、鶴来町内が17.3%、金沢市を含むと47.3%となる。さらに加

賀の平野部（A3）と山間部（A4）をあわせると、63.6%となる。男性が新町を中心に居住地域が広がりをみせているのにたいし、女性の場合は金沢市を中心に居住地域がひろがっているという違いはあるが、男女のいずれの場合も、新町から車で1時間以内の地域に居住している割合が非常に高い。

VI ま と め

新町は明治時代にすでに街道沿いに商工業者の町家が密集し、それらのうち経営困難となった者は街道沿いから転出し、そこに新たな商工業者が転入するというかたちで旧鶴来内での世帯の移動が行われていた。

外に開かれた町内、商工業者の実力重視という新町のマチ的性格は、現在の新町にも次のようなかたちでみられるのではないかと思う。新町の人々は、新町の世帯の転出入について寛容であると同時にあまり関心をもたない。たとえば新町の北部に住む住民に9班のことを尋ねても、「カミ（新町の南部）のほうのことはよくわからない」という答えが返ってくる。一時居住世帯の転出入についても新町の住民の記憶にはあまり残っていないようである。

聞き取り調査のなかで「新町は資産家が多い」という言葉を何度か耳にした。新町では資産家のこと「オヤケ」とよぶ。オヤケは、本家であったり、古くから続く旧家であることが絶対条件にはなっていない。成功した商工業の経営者として町会や地域にどれほど貢献できるかが問題となる。町会で公民館を建設する際のより多くの資金、材料提供、町内での記念碑建立や、金剣宮の記念行事のための寄付、毎年のはうらい祭りでの「はな」などに、他の世帯とは異なるオヤケとして実力が示される。

戦後新町の世帯数の動態は大きく変動する。旧鶴来町は、かつては農村部と山間部の生産物を集荷、出荷、加工する商工業の地として栄えたが、道路整備、交通網の発達により、物資の流通の中心地として重要性は薄れた。現在の鶴来町では、金沢のベッドタウン化が進んでいる。新町の世帯の転出入の動向も、地域全体のこうした時代の流れを反映している。戦後、新町には山間部からの転入が多かった。旧鶴来町と山村との関係は、物資の取り引きをとおしての関係から、住宅地としての鶴来町へ山村からの世帯の転入という人の流れへと変わっていった。

1970年代後半以降現在に至るまで、新町ではとくに街道沿いから多くの世帯が流出した。『鶴来町町史（現代編）』には、鶴来地区の世帯、人口の減少傾向について、「世帯数、人口が減少したのは、ここにも核家族化の傾向というか、若い層が新世帯をもつ場合、鶴来地区から流出していく風潮がみられ、都市型に近いドーナツ現象の傾向がある。」(628)と述べられている。Vで述べたように、鶴来町内では旧鶴来地区内より他の農村部の地区に居住を求める傾向はみられる。しかし、新町では、核家族化の傾向は現在のところみられない。

新町の世帯の半数が3世代同居している。新町の住民の話では、3世代同居世帯が多いのは、

「商売をやっていると核家族はやってゆけない。新町は大きな家が多いので3世代でも住める」と説明される。新町の3世代同居は、しかし、新町の自営業にとくにみられるのではなく、サラリーマン世帯についても同様の傾向がある。新町が金沢の通勤圏内にあること、3世代が同居を可能にする広さの持家があることによって、世帯の次世代を担う若者の流出は、極端なかたちでは生じていないのではないかと思われる。

現在では新町の店舗の数は以前より少なくなり、商店街としての賑わいはみられなくなりつつある。しかし、街道沿いが過疎化しているというよりは、新町内の企業家や自営業者が転出した世帯の敷地を購入し、それぞれの地所を広げている。今後新町は、商店の数は減少傾向を示すであろうが、製造、土木建築業などを中心に、これまでの商店街とは異なる様相をみせてゆくであろう。